

---

# Memory of retrogression

琉叶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Memory of retrogression

### 【Zコード】

N4756Y

### 【作者名】

琉叶

### 【あらすじ】

ちょっととした事故で記憶の殆どをなくしてしまった銀時。  
覚えているのは松陽先生に会う前までの記憶。

その場に居合わせたは土方と沖田。

そして、会つたと直ぐに銀時の発した言葉は・・・  
「俺を・・・殺りに来たのか？」

## 条件反射つて意外に良くあるもんな? (前書き)

この話のタイトルは『Memory of retrogress  
ion』

- 訳 - 逆行の記憶

何となく授業中に思いついた設定なので不定期的にですが連載していくことを考えました。

かなりの駄作ですが監様の温かい目で見守ってやってください

条件反射つて意外に良くあるもんな?

その口は向となく町をぶらつこうとした・・・・・

けど、少し遠めに会いたくもない奴等の車を発見してしまった。

「んだよ、今日またついてねえーなあ

頭をかきむしりながら溜息を吐く。

ふともう一度頭を上げてその車の方を見やれば、ボールを追いかけ  
て一人の少年が車の前に飛び出していた。

思わず体が反応していた。

何とか少年を腕に収め助ける事は出来た。

だが、助けたは良いが次の瞬間、頭に大きな衝撃が走った。

「土方さんいい加減タバコ止めてください。つたく、周りの迷惑考  
えろってんだ（チツ）」

「つるせーな。別に誰にも迷惑かけてねえーだろうが！」

真選組のパトカーの中で何時ものよつこくだらない喧嘩をしている  
二人。

土方は沖田の注意に気を取られ運転があろそかになってしまってい  
る。

そんな一人が乗っている車の前にボールが転がり出でてきた。

だが、一人は気づかない・・・

子供がこちらに気が付く。

車が直ぐそこまで迫っていた。

ボールを拾い上げたその少年は、ボールを顔の前に出して次に来るであろう衝撃に身構えた。

が・・・・・

少年が車の前にいることに気づいたときにはもう遅かった。

もつと方達も駄目だと諦めた時。

「危ねえっ！」

少年の姿は瞬く間にその場から消えていた。

銀色の光が車を横切る。

間一髪で誰かが身を挺して少年を庇つたのだ。

その少年を庇つた者は大きな音を立てて向かいにあつた電柱に頭をぶつける。

土方達は慌ててその者に駆け寄つた・・・

## 条件反射つて意外に良くあるもんな?（後書き）

沢山感想来るといいな

お気に入り登録とかもしてくれたりもつ最高

「何か作者上機嫌だな」

「なんでももう一つ連載している話の方で沢山感想もらえた事が嬉しいですね?」

「私たちを勝手な妄想で好きに動かしてるくせになんかムカつくア  
ル!」

「まあまあ、やつは言わないであげよつよ」

田を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中（前書き）

いや～

さすがに一話だけだと元から何を言つてているのか解らない私の話が  
さらに特別解説班を用意しなければならなくなると思つたのであら  
すじに出てきた部分まで書いて投稿してみました。

まあ俺が・・・じゃなくて

私が書いた時点でもう意味が解らないものなんんですけどねw

田を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中

頭が痛いいえ。

あれ？

どうしたんだつけ？

ああそりだ、屍の足に躊躇<sup>ちゆうちょ</sup>いて抜けたんだつた。

頭を押さえながら体を起<sup>お</sup>こす。

直ぐ近くに声<sup>こゑ</sup>がする。

「あ、あの・・・」

その声は子供のそれだ。

その声の後に大人の声が聞こえた。

「あー、さつきは悪かったな、こっちも前を見てなかつた。こいつのことは気にするな、死んだりなんかしねえよ」

それを聞き安心したのか

「はーー。」

と元気よく声を上げて走り去つていった。

足が遠のく音が聞こえて静かに田を開ける。

田を開けたそこに瓜がっていたのは

瞳孔の開いた目をしている黒髪ストレートの端正な顔立ちをする男と、

栗毛色のえらく可愛らしい顔をしたストレート髪の青年が田の前に立っている光景と、

その男達の後ろに瓜がつてこむこの世のものとは思えない様な世界だった。

しばらくそれを見ていた俺は、その男達が俺に向かつて足を踏み出したのに気が付いて警戒した。

そいつ等は全身黒い変な服を着て腰に刀をさしていた。

殺氣は感じねえ

だが・・・・・

俺は脇に抱えていたはずの刀に手をかける。

スカツ

ない！？

なぜ！？

やうに田の前の男が俺を見下す。

めんどくせこけど聞いてみるか・・・

俺は少し溜息を吐きながら万事屋に近付いていった。

めんどくせえー奴に借りが出来たな・・・

万事屋が子供を庇つて電柱に頭をぶつけた。

「総悟は俺がヤロー」などと言われるか想像して後ろで「ヤー！ヤシト  
やがる。

「あ、あの・・・」

銀時が庇つた少年がヤローを心配したり見て声を上げる。

「あー、さつさは悪かったな、こっちも前を見てなかつた。こいつのことは気にするな、死んだりなんかしねえよ」

それを聞き安心したのか、少年嬉しそうに顔を緩めて何処へともなく走り去つていった。

改めてヤローを見る。

頭をさすって体を起こしたようだ。

少年の姿が見えなくなつた頃、ヤローゆっくり目を開けた。

目を開けたかと思えば目を見開き辺りを見渡す。

周りを確認していたかと思うと俺達を見てなぜだか脇の辺りを手で仰ぐ。

ヤローはそれに慌てた様子を見せた。

だが、直ぐ様にちらに向き直ると仕方なしこと言つた表情をして俺に一言信じられねえー言葉を発つした。

「俺を、殺りに来たのか？」

その瞬間、その場に大きな風が吹き荒れた・・・・・



田を開けたらそこは別世界！でも、気が付いたらそこはベッドの中（後書き）

こんな寄り道ばかりしてもう一本の方ははうまく書けんのかな～

かなり心配です（汗）

よくあるのドッキリとかってホント性質（たじ）が悪いよね。こんな意味で

本当に私は何が言いたいのでしょうか・・・

できればこの話を詠んでくれた方々に聞いてみたいものです。

そんな滅茶苦茶な事出来るか！

これはあんたが書いてんでしょうがあー！

などと書つシシ「ミ」が何処からか聞こえてきやうな気がしますが気のせいでしょうか？

気のせいですよね？

まあ長々と申し訳ありませんでした。  
では、本文をとくどく覗くださーこ^\_^

べるのをキツึかってホント（た）が悪いよな。こんな意味で

周りの音が急に聞こえなくなつたかのような錯覚が起つてゐるの  
一言に驚いてしまつた。

・・・・俺を、殺りに来たのか？・・・

(「ヤツは何を言つてゐんだ……」)

じばりくの間、ヤローとの俺達との間に言い知れぬ緊張感の糸が張  
り巡らされていた。

以外にも、その沈黙を破ったのは総悟だった。

「田那、変な冗談は止めてくださいよ。

俺は土方さんならいつでも殺る準備はできてしまはずばり田那を殺る氣なんてせりやありますんぜ？」

わづかまでの言葉が聞き間違えであつたかのよつて普段べつの反応で対応する総悟。

ヤローはその言葉を聞き一瞬何かを考えていたかと思つと、直ぐに違和感を覚えた様な反応を示す。

俺達を見てから自分の手を見て驚いている。

(何してんだ?)

俺と総悟はヤローの変な行動を不思議に思いお互い顔を見合わせる。

総悟は小首をかしげヤローは何がしたいのか図<sup>はか</sup>りかねていると言つた感じだ。

ほんの数十秒自分の手を見ていたヤローがこちらに顔を向けた。

そして頭をかきながら一つだけ可笑しな質問をする。

「あんたら、俺の」と知つてんの?」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

思わず瞬きをしてしまった。

俺の少し後ろにいる総悟を見てみれば、皿を皿黒させて驚いている  
と言つた感じだ。

万事屋は俺達の事をからかってるんだ、うん、そうに決まってる）

だつてもう過ぎ去つた何年前かのネタだ。

そんな事絶対無いっ！

・・・・ そうだよ、そうだよな。

だつて本編の方でもそのネタもつやつてたじやねえーか。

そんな事絶対無いっ！

いや、でも・・・・ないないない！

ドッキリなんだよな？

これドッキリなのか？

（え、何？

「てめえーふざけてんのも大概にしやがれ。たいがい

俺は混乱しかけていた頭をフル回転させある答こたえに行着いた。  
ゆっくりと口の懷に手をいれタバコを取り出す。  
俺の愛用メソライター「マヨ」でその取り出したタバコに火をつけ心を  
落ち着かせた。

そして心の落ち着きと共に白い煙を肺から外へと吐き出す。

どうせやつやつて俺達を貶めるつもりなんだろ？  
おとし

諦める。今回の事は感謝するがだからと言つてお前に脅迫される

筋合いはねえーよ」

静かに奴の目を見て言った。

だがふと思ひ。

(ん？目が・・・死んでない？)

その事実に驚きヤローの顔を凝視してしまった。

ヤローは俺の視線に気づきやれりに一言付け加える。

「何人の事じろじろ見てんの？そんなに銀髪が気にくわねえーのか  
？」

普段のアーヴィなら必ず天パの方を気にかけて言つてくれるはずだ。

だが違つた・・・

ヤローはえらく反発的な態度とは相反し、その普段とは違つ瞳には悲しみの色が深く刻み込まれていた・・・



みんなのキャラクターがつけてホント實（じた）が悪いよね。こんな意味で

「ベーベー・マ・ジ・カ・ル・バナナ  
バナナと言つたら黄色」

「黄色と言つたらハーナミシ」

「蜂蜜と言つたら甘い」

「甘いと言つたらこの俺が一人でん」

「銀ちゃん」といつたら『マ・ダ・オ』

・・・・・

「神楽?それ、どうこう意味?」

「そのままの意味ネ」

銀時様・・・<sup>たいそう</sup>大層な言われよつで・・・・(同)

「ねえ何(同)って。もしかして同情か?同情のことなのか!?

・・・・ふざけるなあー!」

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない（前書き）

もう嫌！

何が書きたいのか何を書いているのか全く分けわからんよくなつてしまつた。

これを見て？と思つたかとは本当にすんません

自分で～と頭の上でぐるぐるさせたいです。

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない

(なんだここは?

てかこいつ等何?

殺氣は感じねえーけどやつぱ俺を殺しに来たのか?

てかなんで俺身体でかくなつてんの? )

じつと自分を睨んでくる黒髪の男。

その視線が気にくわなくて思わず髪の事を言った。

だがあいつ等せひに自分の顔を睨んでくる。

(なんなんだよコヤツ。 一いつ等も俺のこと鬼とか思つてゐるわけ?  
それとも・・・・・)

ヤローは少し俯きながら一つ悪態をついた。

俺たちにではない、それに、ヤローは独り言のつもつだつたのかも  
しない。

「たく・・・・またあいつ等金で雇つた奴らで俺を殺そつとしたのか・・・・・

ビリセ風貌の事なんか軽くしか説明しなかつたんだうつな・・・・・」

その脳みそが悲しみを帶びてこるよつに感じた。

それからヤローは漏息を軽く漏らしながら周りを確認。

のうちに俺たちに聞いてきた。

その顔はドッキリや冗談などではない、いたつて真面目なものだつ

「 何処？ 」

あんた等が俺をここに連れてきたわけ？

天人だらけって事はどうかの星か？

一体いくらで俺を殺しに来るよう言われた？

後なんで俺の身体でかくなってるわけ？

あんた等なんか知つてんの？」

た

・  
・  
・  
・

人の目とか見ても死んでるとか死んでないとか実際はわからない（後書き）

とどのつまつなにがしたいのか解らないので毎日自問自答ちゅうついです。

この話を見て皆さん本当に面白こと思つてくださいのじゅうつか？

ていうか話が短すぎ！

会話もかみ合つてないというかもうグダグダじゃん！

全てにおいてグダグダだの寒中水泳じゃん！

周りの皆さん空気がほら冷たい！

あれ？

この例えなんかうまくない？  
ねえうまいよね？

なんて事を一人で言つています。

傍から見ればただの危ない人・・・・・

もつ泣きたいです・・・・・

題か思いつかないしわざ適当に打ち込んでおけー（前書き）

「全然先にすすまねえな」

全く持つてそのとおりですねえ。たぐ、ijiの作者は何をしてるんだか（ハアー）

「…………おめえーがその作者だらうが！」

えへッ

題名思いつかないときは適当に打ち込んでおけ！

今こいつなんて言った？

やつも「あれマジなのか?」

不覚にも思わず頭の中で叫んでしまった。

いつもなら「ふざけるなっ！」と刀を抜いている所だが、奴の顔は  
いたつて真面目そのもの。

これはもづぼぼ確定で間違いないのだが、最後の悪あがきといった  
所で一応確認を取つてみた。

「え・・・つと・・お前、自分の名前・・・解るか？」

俺は最後の希望をこの質問に託したが、その希望はあっけなく散ってしまった。

「お前等馬鹿？あこひびて捨てられたるすり覚えてねえ筈のこの俺  
にこんな事聞くか普通」

(ん？あいつ等？あれ、確かに記憶喪失ってのは記憶を失うもんで……)

俺が一人考え込んでいたのを一人楽しげに見ていた総悟だが、銀時のこの様子にさすがに何かを感じたのだろう、俺の方を馬鹿でも見るような目で見ていた奴に一つ確認を取る。

「旦那、自分の歳……わかりやすか？」

銀時はそれを聞くとまたまた馬鹿めいた顔になってしまった。

そして、総括の質問に答えたよいとしたところでやの場を立ち去るといふことである。

「お、おこなつと待てー。」

この場を立ち去るやつであるヤローの肩を掴み引き止める。

ヤローは肩を掴んだ俺の方にゆっくり顔だけ向け殺氣を飛ばした。

「俺を殺しに来たんじゃなかつたのかよ？」

お前等から殺氣は感じられないから大人しくしてやつてんのに変な質問ばっかしやがつて・・・

殺すきねえなら俺の身体早く元に戻せよ。

そんで、あいつ等に言つとけ、てめえーで生んだのに殺そうとすんなクソババアってな・・・」

その時は深い憎しみの炎をたきらせていく様に感じた。

(ん？・・・ちょっと待て！身体を元に戻す？こいつ、何言つてやが・・・)

その本人の言葉によりすぐに解消される。

「もういいから身体だけ直せよ。大人の身体なんて違和感ありすぎ  
て気持ち悪いんだよ・・・」

頭をかきながら言う姿は何時ものアイツ、だが、今言つた大人の身  
体つて・・・

その結論に辿り着けば、今まで奴が取った行動の殆どに納得がいつた。

題名についてかないとわざ適当に打ち込んでおけー（後書き）

教えて！銀八先生！

「はーい。今日はやる事が無いのでこれでおわります」

「きりーつ、例、着信ボイス」

「面白くなかったので次からは

とこつよーに

「・・・・何がしたいの？」

## 困った時に限って厄介な人間が出て来る（前書き）

銀時「なんで良い事をした筈なのにこんな目にあつただよ・・・」

土方「知るか」

沖田「知るかつて土方さん、あんたが余所見をしなければ田那がこんな目にあつてしませんでしたぜ？」

銀時「そうだそうだ。この全ての原因は多串君にある。なんで記憶喪失装つて金を沢山せしめてやつー。」

沖田「それはいい考えです田那。ビットせなら汚名も着せじやつてのはどうですかい？」

・・・・・フルフルフル

土方「やけるのも大概たいがいにしゃがれええええー！」

困った時に限って厄介な人間が出て来る

「・・・旦那。俺たちは旦那の身体に向もしてやせんぜ?」

総悟がヤローの言葉に一瞬<sup>さと</sup>瞬<sup>き</sup>をしたが、とりあえずヤローが勘違  
いしている事を諭<sup>さと</sup>そうとする。

「その身体が今の旦那のものであ

ついに言った。

ヤローを見れば、先程の総括と同じように瞬をじてくる。

よほど驚いたのか、深い溜息を頭を搔きながら漏らしている。

そしていつか見て同情をした時のような色をその顔にかもし出す。

「えっと・・・なあ、あんた等ここに来る前に頭とか打たなかつた  
？」

「その身体が今の旦那のものである

(ハ?)

思わずその言葉が口をつっこめて出てしまつになってしまった。

俺は何度か視界を閉じて冷静さを保とうとする。

(ハア～こいつ等大丈夫かよ・・・・・)

頭が何とか冷静さを取り戻す。

その後に俺は何故か目の前の連中の事を心配してしまった。

「えっと・・・なあ、あんた等ここに来る前に頭とか打たなかつた  
？」

何とか相手を気遣うような視線を向けないように注意して、その言葉を田の前の連中に言った。

それを聞いて、茶髪の方の男がまたしても突拍子もねえ事を言つ。

「頭を打ったのは旦那の方でさあ。旦那、もう一度聞きやすが旦那の歳はいくつですか？」

・・・・なんでこんな時にそんな事を。

確かに頭には何故か痛みを覚えるが俺は正常だ。

とりあえず、田の前の奴が真面目な顔で俺の顔を見ているので先程の質問に答えてやる。

「しつけ～なあ。歳は五十七ぐじやねえの？」

仕方なしにと俺の歳を教えてやれば、あいつ等はお互いの顔を見合わせ頷きあつた・・・

困った時に限って厄介な人間が出てくる（後書き）

こきなり変な事を言つてへる奴にも向かしら理由と言つものがあるに違はない——

短くてすみませんっ！！

しかも一回も聞をあけてしまって・・・

これからも「」のよつた事がある可能性大です。

本当にすみません（汗）

なんか最近謝つてばつかじやね？

こきなり変な事を書ひてゐる奴にも向かしら理由と書つものがあるに違ひない。

頷きあつた二人は静かにこちらを向き、信じがたい事を呟つた。

「お前は今、記憶喪失になつてゐようつだ」

その言葉を聞いたときの俺の反応はこうだ。

(何? 記憶喪失って何?)

てか記憶? 過去を忘れるとかか?

俺ひっそりかこと覚えているね?

何訳のわからない事を・・・こんな嘘をついて俺を油断させよう  
と言つ作戦がなんとか? )

いきなり訳の分からない事を言われた上に、前にいる連中は全くの他人。

知り合いですらないのでそんな失礼気回りがない事を思つた。

その表情は田の前にいる連中を馬鹿にするような目付をだつたのではないかと思つ。

すぐ近くの田には警戒の色が浮かぶ。

そりゃ当然の反応だと思つ。

今まで散々命を狙われてきた。

それこそあんな手こんな手で・・・・

その為今回のこれも何かの作戦か何かだと思ったのだ。

俺たちは信じられないが、今田の前にいるヤローは五、七歳以降の記憶がなくなってしまったらしい。

総合と俺は顔を見合せ田舎で図画をした。

ヤローにこの事を言つて見れば案の定・・・

俺たちを馬鹿でも見るよつね田で見てきた。

だが、その後すぐに警戒しているような色をその紅い瞳に浮かべる。

俺と総悟はそれに驚いたが、すぐに誤解を解こうとした。

そう、俺達がただ馬鹿を言つて居るといつ誤解を・・・

「信じられねえ様だが本当だ・・・現に俺たちは記憶を失つ前の前を知つてゐる」

やつとつてしまふくして、奴は少しだが警戒を薄めた。

「記憶を失う前の俺？それは今の本当の『俺』と言ひ意味か・・・？」

「そうだ」

「今の俺は本当に大人だったと・・・？」

「ああ」

そこまでは俺を疑つような眼差しで見ていたヤローだったが、

一番田の質問の答えを聞き終えたところで、最後の薄い警戒をいった。

俺は色々と今までにあつた為、人の考えている事とかを悟るのが当然のようになつていた。

だから相手が嘘をついていればすぐに解る。

田の前の奴の『眼』は嘘をついてる時の田ではない。

俺はそれを感じ、最後に残していた警戒をといた・・・

こきなり変な事を言つてぐる奴にも向かしら理由と言つものがあるに違ひない——

「今週のアニメ銀魂面白かったよな~」

「うむ。あの時のカーデはさすがのこの俺でもやばかつたぞ……」

「ジラ、お前自分で宇野強いとか言つてゐるわりに弱いよな~」

「ジラじゃない！桂だ！それに俺は弱くなんかない！現にこの闘だつて俺が勝つたではないか！」

「あれあ俺が手加減してやつたに決まつてんだろ？』

「なに！？

では俺はエリザベスだけでなく昔の戦友にまで騙されていたのか  
！？』

「ジラはもうこうとこがまつこと鈍いからアハハハハハ――！」

意外な事実を知り、それからじめいくの間はある

「俺は強いぞ~」

ところセリフを宇野では口にしなくなつたとか・・・

w

いたずらってバレてないと思つてこの時に限つて100%バレてるから要注意だ

更新遅れですみませんでした

ていうかついにお気に入り登録十人だよ十人！！

やばいよ嬉しいよ！

どうしよう、ニヤニヤが止まんないw

いたずらってバレてないと困つてこの時に限つて100%バレてるから要注意だ

「教える」

「「ハア?」」

警戒を解いたかと思えばまた意味の解らない事をぼそぼそやがる田の前の男。

俺達が「何を?」という表情でも浮かべていたのだろうが、より詳しく何を教えて欲しいのかを言つヤロー

「「」の時代の事と俺の情報だよ。他に何があるってんだ?」

まるで俺達を挑発していくような言い方は今の対して変わらない。

俺は思わずキレかかりそうになった。

が、なんとかそれを耐えて見せた。

(落ち着け、落ち着け……)

(相手は一応ガキなんだ。ここは大人の余裕を……)

だが、後ろから聞こえてきた言葉に俺は我慢の限界を超えたのだろう、何の迷いもなくキレてしまった。

「犬の餌ばっかり食つてるから頭が油まみれになるんでえ」

ブチッ

「総悟！おめえも「ハア？」とか言つてたじゅねえか！」

「…」  
てかマヨネーズを犬の餌呼ばわれるんじゃねえええええ…！！！

総悟に剣を振りかざそうとしていた後ろでは、マヨネーズという言葉を聞いて小首をかしげている奴の姿があつたとかなかつたとか・・・

場所は真選組屯所

「万事屋が記憶喪失って本当ですか！？」

「旦那が記憶喪失って本当ですか！？」

襖を勢い良く開けて入ってきた近藤さんと、その後を付いて走ってきた山崎の大声が部屋に響き渡る。

俺はとつとて耳を押される。

まだ耳がキーンと言つている。

万事屋のヤローは対応に遅れたのか固まってしまっている。

「旦那大丈夫ですかい？」

総悟が面白半分でヤローの顔の前で手をひらつかせる。

だが反応がない。

総悟は向を思ったのか銀時の頭を掴もつとする。

サツ

瞬間、ヤローは凄い速さで後方に飛びのき総悟から離れる。

そして冷めた目で総悟を見て三つ。

「てめえ、俺の頭を掴んで投げ飛ばすかと思ったら……」

それを聞いて肩を竦める総悟。

じつせいら図図いらしつだ。

( 総悟はだから頭を掴もつと・・・・・ )

一人そんな事を納得していると、総悟が驚いたとばかりに目を大きく見開き、ヤローに一つ質問をした。

「田那、俺が頭掴んで土方コノヤローに投げようとしていたのをよく解りやしたねえ」

途中変な言葉が聞こえたが、確かにあの動きは以上だつた。

総悟の言葉を聞きこの部屋にいる全員が、ヤローに向いた。

いたずらってバレてないと困つてこの時に限つて100%バレてるから要注意だ

「白銀の生き様つてあのヤローを中心で書かれてるよな

「やうですね~」

「これも一応真選組てるけど、なんか悪役っぽくね?  
子供でさうになつた拳銃ヤローを記憶喪失とかにして・・・

「何言つてんですか土方さん。

悪役なのは土方さんだけですか

「総悟。お前、俺に恨みとかでもあんのか?」

「いえ、恨んでなんかいませんって^\_^  
恨みの代わりに殺意はありますけどねえ~」

「・・・(ヒクヒク)笑

「・・・(ニヤニヤ)笑」

何事も初めての状況には頭がついていないうるものである。 (前書き)

一週間出でること一つ画面が早くも破れてしまつて・・・

本当にいいのか・・・

あつ、感想はダンダンくだれーね!?

私はそれが楽しみで投稿しているんですからー

なことばよひつけて願いします

何事も初めての状況では頭がつこないものである。-

思わず感じてしまつたどす黒いオーラに反応してその場を飛びのいた銀時に痛いぐらいの視線が注がれる。

銀時は今まで感じたことのないタイプの視線に頭が混乱する。

といつか軽くパニクつてしまつ。

(なんでみんな俺をそんな鋭い視線で見るわけ?

俺殺氣とかは分かるけどその視線の意味分かんねえんだけビオオ  
オオオオオ！？）

俺は一瞬混乱しそうになつた頭をクールダウンさせた。

（たしかあの茶髪の奴は何でそんなんが解つたのかとか聞いてきた  
よなあ・・・・・・

じゃあこの視線はみんな俺にその答えを求めてるものか・・・・  
？）

頭を落ち着かせ今この状況を理解する。

だが銀時はその質問の意味が分からぬ。

一生懸命頭を振り絞りその答えを導き出すべつとする。

それでもやがてぱつ答へは出ない。

仕方なく銀時は思った事をあつのままに言い放つた。

「えーーっと…………なぜってそりゃ普通分かるもんじゃねえ  
の?」

予想していたなごうとは全く違つちが返つてきました。

- - - - 普通分かるもんじやねえの? - - - -

頭の中での言葉にリピートがかかった。

(普通？普通そんなん分かるわけねえだろ・・・・・・

コイツの今の精神年齢は六、七なんだよな？

つて事は、今までコイツはそれが当たり前に身に付いてしまつ環境にいたつて事・・・・か？）

俺はヤローの言葉と今のアイツの状況を考え軽い推理をしてみた。  
だが俺はちゃんとした答えが出てこない。

すると、思つても見なかつた人物がヤローに質問を投げかけた。

多分俺と同じ考えだつたんだろう。

「万事屋・・・今までお前にある記憶だけで良いから、

お前、今までどういつ風に暮らしてきたか教えてくれないか？」

静かに尋ねる近藤。

その日は、これから返つて来るであろう言葉を受けて止めるよといつ  
真剣なものだつた・・・

何事も初めての状況には頭がつこないものである。 (後書き)

「最終的には一週間もたなかつたな

「何が一週間投稿できないうアルか！？  
おもくな投稿しちゃつてるネー！」

・・・・・まあまあ細かい事は気にせずに

私も反省していますから^\_^

だつて・・・

勉強しようと思つても手が進まないんですよ

それだつたらまだ投稿した方が良いかなつ？で・・・

「あの、本当に受験生なんですか？」

「受験生つていうかただの馬鹿アルな

「ああ、これは純然たる馬鹿な証拠だな

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4756y/>

Memory of retrogression

2011年11月24日19時50分発行